

グローバル化する若者文化（1）若者のグローバル意識・行動の多様性

中央大学 松田美佐

1. 目的

本研究の目的は、2015年に東京都杉並区と愛媛県松山市で20歳を対象に行った質問紙調査の結果から、グローバル化とローカル化が同時進行する現代社会における若者文化の実態を明らかにすることにある。この調査は1990年、2005年、2009年に実施された調査と比較できるように設計を行い、25年間の若者文化の変容についてとらえることも目的としている。

2. 方法

2015年調査の詳細は以下のとおりである。

- a.調査対象母集団：東京都杉並区と愛媛県松山市に住む20歳の男女
- b.標本数：それぞれ1,000人 c.抽出方法：有権者名簿からの層化二段無作為抽出法
- d.調査期間：2015年11月2日～22月（のち12月7日まで延長）
- e.調査方法：郵送法
- f.回収結果：杉並区259人（25.9%）、松山市214人（21.4%）、計473人（23.7%）

比較対象とする調査であるが、1990年調査は宮台真司を中心とするグループにより関東7都県、関西7府県で大学4年生を対象に行われたものであり、対象数は10,429人、有効回答数は1,548人（14.8%）であった。2005年、2009年調査は松山大学社会調査室によるもので、いずれも調査対象は杉並区と松山市に在住する20歳それぞれ1,000人、有効回答数は2005年調査が杉並区266人（26.6%）、松山市249人（24.9%）、2009年調査は杉並区308人（30.8%）、松山市250人（25.0%）であった（詳細は、宮台真司ほか、1992、『高度技術社会における若者の対人関係の変容』、松山大学社会調査室、2006、『若者の生活と文化—愛媛県松山市、東京都杉並区二地点比較調査』、同、2010、『若者の生活と文化—愛媛県松山市、東京都杉並区二地点比較調査』を参照のこと）。

3. 結果

2015年調査において「グローバル意識の高さ」「国内での外国人との交流経験」「渡航・語学学習経験」「渡航経験」「留学・渡航希望」は、居住地、性別、本人学歴、両親の学歴、実家の暮らし向き、パーソナリティなどさまざまな項目との関連性が見られた。この中で最も強い関連性が見られた居住地によるグローバル意識・行動の違いを検討するために、大学生に絞って杉並区と松山市で比較したところ、概して、松山の大学生より杉並の大学生の方が、外国への関心が高く、外国人との国内での交流経験もあり、渡航・留学や語学学習の経験者も多いことがわかった。さらに、今後の渡航・留学希望者も多く、自分のこととしてグローバル化の進展をとらえている傾向が見られた。

4. 結論

居住地によりグローバル意識・行動に差が見られたことは、先行研究でグローバル意識・行動に影響を及ぼすものとして指摘されているパーソナリティや個人の生育環境だけでなく、居住環境が与える影響が大きいことを示す結果である。この居住環境要因とは具体的にどのようなものなのか、都市がもたらす人間関係の多さや多様性、さまざまな機会の多様性がもたらすものなのか、当日の発表では先行研究の知見を踏まえ、分析した結果を報告する。

なお、本報告の一部は平成27年度科学研究費基盤研究(B)「ポスト・モバイル社会に関する社会学的研究」（課題番号：15H03419、代表：富田英典関西大学教授）の成果である。